進修同窓会々報

発行 土浦一高進修同窓会　編集人 同窓会会報編集委員会　委員長 大曽根宏亮　印刷 常陽新聞新社

写真提供＝大久保写真館

土浦一高校歌

堀越　晋　作詞
尾崎　楠馬　作曲

一、沃野一望数百里　関八州の重鎮とて
そそり立ちたり筑波山　空の碧をさながらに
湛えて寄する連波は　終古渝らぬ霞浦の水

二、春の弥生は桜川　其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏　蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声冴えて　湖心に澄むや月の影

三、此の山水の美を享けて　我に寛雅の度量あり
此の秀麗の気を享けて　我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて　我に武勇の気魄あり

四、筑波の山のいや高く　霞ケ浦のいや広く
嗚呼　桜水の旗立てて　我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児　亀城一千の健男児

―目　次―

2面　平成16年度総会報告
3面　会長あいさつ
4面　学校長あいさつ
　　旧土浦中学校本館竣工百年記念式典
　　旧土浦中学校本館竣工百年記念講演
5面　県下中学連合野球大会
　　百年記念親善試合
6面　校旗制定百年記念校歌祭
　　旧本館特別公開
7面　支部だより
8面　お知らせ・お便り
9面　母校だより
10面　職員室だより・各部だより
11面　進路だより
12面　平成15年度決算報告等

平成十六年度 進修同窓会 総会開かれる

去る四月十一日(日)、平成十六年度定期総会が、母校体育館にて約三五〇名の会員出席のもとに盛大に開催されました。総会前には、旧本館玄関前庭において高六回の出席者一同での記念写真撮影もあり総会前から和やかな雰囲気に包まれました。

総会は、まず、弦楽部の演奏に続いて、応援指導部の指揮のもと、吹奏楽の演奏にあわせ、校歌と一高讃歌の斉唱、物故会員に対する黙祷の後、幡谷祐一会長、山田隆士校長の挨拶があり、青山和義副会長を議長として以下の議案が審議されました。

会長あいさつ

一、平成十五年度事業報告及び決算報告
二、平成十五年度進修同窓会基金決算報告
三、別途積立金報告
四、平成十六年度事業計画及び予算
五、平成十六年度進修同窓会基金予算
六、旧本館竣工百年記念事業
①旧本館関係記念事業
②校旗制定百年記念事業
③硬式野球親善大会
④予算
七、役員改選
八、その他

十分な審議の後、全議案とも満場一致で可決・承認されました。

本年は、中四十三回(六十周年)、高六・定四回(五十周年)、高十六・定十四回(四十周年)、高三十一・高理八・定二十九回(二十五周年)の各周年については例年どおりですが、通信制については最後の卒業生が卒業されてから四十年ということで、通信制の各年卒業生全員をお招きしたところ、二名の方が出席されました。

祝賀式では、高七回で来年五十周年を迎えられる石田晴久氏より祝辞が述べられました。招待者への記念品贈呈の後、高六回卒の鈴木親雄氏より、本年五十周年を迎えられた皆様を代表して謝辞が述べられました。

また会場を別にしての祝賀会では会場一杯の参加者のもと、往時を懐かしんでの交歓が和やかな雰囲気のもとで繰り広げられました。

応援指導部指揮による校歌斉唱

総会全景

同窓会会長あいさつ ―土浦一高の諸君へ―

会長　幡谷　祐一

「人生は白駒の隙を過ぐるが如し」と言いますが、宇宙の悠久の流れから見ると、人の一生はまさに瞬きをするくらいの時間であります。このように限られた人生なのですから、私達は時間を大切にしなければなりません。お金は貯めておいて後で使えますが、時間は貯めておくことができません。それ故に、時間を無駄にすることは、自分の人生のある部分を捨てることになります。

特に、生徒諸君は将来の展望、友人関係など総てにおいて、今が一番大切なときです。一日一日を充実して送れるように努力すべきです。

格言に「日に三度己を省みる」とあります。充実した毎日とするには、人のために努力できなかったのではないか、友達と交わって誠実でなかったのではないか、また教えられたことや伝えられたことをよく習得しなかったのではないかなどと、自分の言動を反省することが求められます。私達は省みることにより、生理的にも精神的にも初めて生き、かつ進むことができると言えます。

省という字は「たびたび」という意味がありますが、また「はぶく」と読んで、省略するという意味にもなります。省みることにより、余計なもの、道理に合わぬものがはっきり判って、これらをよく省くことができるようになります。人間は緊張ばかりしていると疲れ果ててしまいます。そのため趣味の時間を持つ、あるいは何か自分が熱中できることを見出す必要があると言えます。

このように省は大事なことであり、私達の人生もこれに尽きると思います。生徒諸君も省くことを覚えて効率的に勉強をし、自分の時間を作ることを考えれば、よい結果が出る筈です。

「嗚呼桜水の旗立てて、我が校風を輝かせ・・・」

学校長　山田隆士

土浦一高進修同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また日頃は、本校の教育活動及び学校運営等に多大のご支援、ご指導を賜り厚く御礼を申し上げます。

お陰様で本校は、今年度、創立百七年目を迎えますと共に、去る十一月には「三つの百年」事業を無事に終了することが出来ました。これもひとえに同窓会会員の皆様の温かいお力添えとご協力があってのことであり重ねて感謝を申し上げます。なお、「三つの百年」事業の内容等につきましては、すでに会報特集号に掲載されておりますので省略させていただきますが、ここで若干の感想等を述べ報告とさせていただきます。

先ずメインの行事として十一月十三日に実施されました「旧土浦中学校本館竣工百年記念式典」には、茨城県副知事初め多くのご来賓をお迎えし、厳粛な内にも感慨深い式典とすることできました。会場にお越し頂いた旧職員の先生方や同窓会等の皆様のお顔を拝見していると、営々として受け継いできた自信と誇りを感じる瞬間でもありました。併せて建築文化史家の一色史彦氏（高十一回卒）による記念講演「旧土浦中学校本館と駒杵勤治」が行われ、当時の近代建築の優れた創造力や技術力等を改めて認識し、驚嘆いたしました。この他、旧本館特別公開、旧正門門扉の修復等の事業が同窓会の皆様のお力添えにより実施され、本校においでになった多くの皆様に親しんでいただく機会が得られましたことに深く感謝を申し上げます。

更に、歴史的、伝統的に係わりの深い学校である水戸一高、下妻一高、竜ケ崎一高のご協力を得て開催された「県下中学連合野球大会百年記念親善試合」及び「校旗制定百年記念校歌祭」も当時の先輩方に負けない熱気を感じ取れた二日間でした。参加した硬式野球部、応援指導部、吹奏楽部等の生徒たちは、それぞれが自校の歴史と伝統を受け継ぐのは自分たちだとの気持ちが十分に感じられ、頼もしい限りでありました。

晴天の土浦市営野球場で行われた親善野球では接戦・逆転等の好試合となり、百年前の先輩たちも演じたであろう意気高らかな試合展開に感動させられました。また、本校体育館での校歌祭では、同窓会の皆様から寄贈された全日制及び定時制の校旗（応援旗）が高々と披露され、「嗚呼桜水の旗立てて、我が校風を輝かせ・・・」と声高らかに歌いあげました。ちなみに全日制に贈られた百年記念旗は畳六畳分（二七〇〇×三六〇〇ミリメートル）もあり、県下では最大の応援旗と言えるものであります。

また、特筆すべきは、進修同窓会の幡谷祐一会長から特別協賛の形で「土浦一高讃歌」CDが制作され、全校生徒・教職員等に配布することができたことであります。更に、旧本館に保存されている宮本卯之助氏（中五回卒）寄贈の「太鼓」もお孫さんに当たる七代目宮本卯之助氏の善意で修復していただくなど、多くの先輩や関係者の皆様の熱い想いを込めたご支援をいただきましたことに心から御礼を申し上げます。

在籍する生徒・職員にとりましては、節目の年に巡り合わせた感動と感激を胸に秘め、「嗚呼桜水の旗立てて、我が校風を輝かせ・・・」の精神を受け継ぎ、更に発展させる決意を新たにしているところであります。

さて、百年以上の風雪に耐えて旧本館（旧土浦中学校本館）が燦然と輝き続けるのを前にして、本校が新たな時代に先駆けて取り組むべき課題は山積しております。

平成十六年度大学入試の合格状況につきましては、少子化等により県の方針で一学級減（具体的には理数科の廃止）となり、初めて一学級分の生徒減少の中で取り組むことになりました。その結果は、前年に比して遜色のない実績を生徒たちはおさめてくれました。（詳細は十一面の別表を参照下さい。）

近年、本校に入学してくる生徒の百％が上級学校への進学希望であり、とりわけ国公立・難関大学志向は高まるばかりであります。これに対し保護者・地域の方々の期待にどう応えていくかが重要な課題の一つと言えます。本校は、決して特定大学合格数を競い合うことに目標があるのではなく、全人教育を目指し、知・徳・体のバランスのとれた人間づくりに努めてきていると自負しています。しかし、昨今の社会風潮の影響や変化の激しい時代にあって、生徒や職員による校内努力にも限りがあることは否めない状況にありますが、ここに今後の方向や新たな取り組み計画等を若干ご紹介し、ご理解をいただく機会とさせていただきます。

先ず本校の基本は、伝統で培われた学年制を堅持し、「授業第一主義（五十五分）」を貫くと共に、三学期制の中で従来の三大行事（一高祭・一高オリンピック・歩く会）を中心とした教育活動や部活動の充実に努めることとしています。そういたしますと、定数法や諸制度のため、限られた教職員数、予算、施設・設備、制度上の制約等をどう乗り越えるかが喫緊の課題であります。

しかし、このような中にあっても学校では、例えば「医学・医療系」進路希望の実現のためのプランや土曜講座の充実等に取り組んで行きたいと考えています。また、フルブライトメモリアル基金（FMF）事業に応募し、マスターティーチャープログラム（MTP）に参加することが内定しています。このプログラムは、本校における「国際理解教育、情報教育及び環境教育」に新たな展望を開く試みと言え、新たな挑戦と位置づけられます。具体的には、①相互訪問による交流　②情報技術を使った環境教育プログラムの共同研究（統一プロジェクト及び米国パートナーの学校との共通ペアプロジェクト）で、①統一プロジェクト②米国パートナーの学校との共通ペアプロジェクト・・・環境をテーマとしたペアプロジェクト（例：水質調査、火星探査機等）が計画されているところであります。更には、少子化等に伴う県教育委員会の学校再編整備計画の中での本校の将来を見据えた改編なども視野に入れた研究が本校にとっても重要とも考えています。

このように本校は、基本的には長い歴史と伝統の中で築き上げたシステムを継承すると共に、新たな取り組みにも挑戦することで保護者や地域の方々の期待に応えようとしています。ただ、これらの実現や推進を図るためには、どうしても同窓会の皆様のご支援やご協力を仰ぐことが欠かせないものと考えており、具体的には今後、役員の方々とご相談しながら進めていきたいと考えております。

また、近年の教育改革の中で学校評議員制度の導入、学校経営計画の公表及び学校評価（保護者・生徒・地域によるアンケート調査）等が取り入れられています。更に、本校の状況等を広く公開する意味でもインターネットのホームページによる情報発信もしておりますので、どうぞアクセスしていただきご意見、ご感想等がありましたらお寄せいただきたいと思います。

最後になりましたが、これからは「情報公開や地方の時代」「自己責任の時代」などと言われています。本校生が真に「一身独立して、一国独立す」の気概を持って国や地方をリードできる人材として送り出せるよう職員一同、力を合わせてまいりますので今後とも宜しくお願いを申し上げます。

旧土浦中学校本館竣工百年記念式典

日時　平成十六年十一月十三日(土)　午前十時より
場所　土浦一高進修記念館

旧本館竣工百年をことほぐかのようなさわやかな好天のもと、進修記念館には、県から副知事、教育次長、県南総合事務所長、県南教育事務所副参事、地元土浦から市長、教育長、近隣小・中校長、さらに百年前の県下六中学である水戸一、下妻一、竜ケ崎一、太田一、水海道一の各高校長をお迎えし、同窓会役員、現・旧教職員及び生徒等計百五十余名を集め、記念式典が厳粛かつ盛儀のうちに挙行された。次に、そのあらましをお知らせする。

横田尚義進修同窓会副会長の開式のことば、国歌斉唱に続き、大曾根宏亮記念事業推進委員長より本日を迎えるまでの経過が報告され、百年前の旧本館竣工・校旗の制定・本校主催による県下初の中学野球大会の三件を併せ記念して「三つの百年」とし、土浦一高及び進修同窓会共々記念事業を進めてきた経緯が説明された。

次に、幡谷祐一進修同窓会長より、先年の創立百周年と今回の旧本館竣工百年の再度にわたる大きな節目に同窓会長として携わった幸せをかみしめながら、母校と一緒にご自身も百歳までがんばりたいという力強いご挨拶があり、山田隆士土浦一高校長からは、今般の記念行事が同窓会長はじめ幹部役員の協力により円滑に進められたことへの謝意が述べられ、社会の仕組みすべてに改革が進められつつある現在、「三つの百年」を契機にその伝統をふまえながら、生徒に改革に向かう高い志と新しい社会を形成する意欲を喚起していきたいという、教育現場からの抱負と指導方向が披瀝された。

さらに、来賓である角田芳夫県副知事、中川清土浦市長、稲葉節生水戸一高校長より、それぞれ慶祝のおことばをいただいた。

ここで、幡谷進修同窓会長から一高全生徒並びに教職員に記念品が贈呈された。記念品は校歌、第一・第二応援歌、および土浦一高讃歌を組み込んだCDである。

校歌斉唱、青山和義進修同窓会副会長の閉式のことばで式典は終了し、記念講演に移った。

旧土浦中学校本館竣工百年記念講演

演題「旧土浦中学校本館と駒杵勤治」

講師　建築文化史家　一色 史彦氏（高11回卒）

講演に先立ち、栗山作次郎推進委員より講師紹介があり、「ものにこころあり」をモットーに、建築物にもそこにこめられた先人の思いと流した汗とを感じとり、それを未来につなげたいという、一色先生の基本姿勢が披露された。

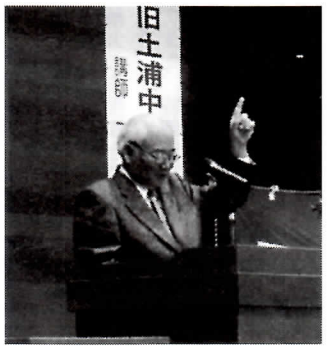
そのお人柄のように静謐な、それでいて歴史的建造物とその創出者に対する先生の熱い思いがひしひしと伝わる七十分であった。

講演後、活発な質疑と応答が交わされ、旧本館に対する出席者の関心の高さがうかがえた。

講演の骨子については先生ご自身によりおまとめいただいたものがあり、それを次に掲げる。

《講演要旨》

昭和五十一年二月三日付けで、旧土浦中学校本館と旧太田中学校講堂とが国の重要文化財建造物に指定された。旧制中学校関係の校舎としては全国初の事例である。その一年半程前に本館の一部改修工事の設計監理を県教育委員会に頼まれた私は、本館正面の小屋裏に釘打ちされた一枚の棟札を発見した。表「上棟式大棟梁茨城県技師工学士駒杵勤治」、裏に「請負人石井権蔵明治卅七年七月五日」と墨書されたもので、この発見が文化財指定に大いに役立った。



さてそれにしても駒杵勤治が設計し監理した建造物の数の多さと質の高さはまさに驚異的なものである。その作品群を次に列挙しておく。

◇県立図書館〈明治36年竣工、昭和20年戦災にて焼失〉
◇県立商業学校（現水戸商高）本館〈明治37年竣工、一部現存〉
◇県立土浦中学校本館及び階段教室〈明治37年上棟、階段教室は昭和49年春取り壊し〉
◇県立太田中学校・同竜ケ崎中学校・同水海道中学校・同高等女学校（現水戸二高）講堂〈同一の設計図に基づき明治37年上棟、太田中以外は取り壊し〉
◇麻生警察署及び下館警察署本館〈同一の設計図に基づき明治38年竣工、麻生警察署は一部解体材保管〉

駒杵氏が県庁に在職したのは僅かに二年三カ月という短期間であるが、手掛けたこれらの建築の様式はゴシック・バロック・ロココという多彩なものであった。そのエネルギーの凄さこそ明治特有のものというべきだろう。

当時の県知事河野忠三が教育振興四カ年計画にかけた熱意がその背景にあったものと考えられる。東京帝国大学建築学科を同期生よりも半年ほど早く卒業して本県に赴任した駒杵氏は弱冠二十五歳であった。

本校の卒業生、奥村好太郎・大久保滋両氏が平成六年に自費出版された一高本館の写真集「気韻生動」は素晴らしい本である。これに寄せられた駒杵氏の養女幸子氏の詩の一節には、

帝大の建築学科を父上は
首席で卒業されしと聞きぬ

とある。作品群はまさにその技術の高さを裏付けているが、本県を離れてからの建築家としての人生は恵まれたものではなかった。享年四十二歳という若さで福岡県で亡くなっている。氏にとって本県での二年三カ月が人生の華であったといえるだろう。

それにしてもこの本館を見上げる時、建設当初は三カ所の三角屋根を飾っていた雄大なアカンサスの花が失われたことが大いに惜しまれる。この棟飾りが復元された姿を是非とも見たいものである。

県下中学連合野球大会 百年記念親善試合

色川　弘（中48回・亀城クラブ）

《記念親善試合について》

六日朝、八時、市営球場から開会を知らせるマイクの声が、静寂な湖面に消えていった。

開会式後、まず四校の監督に、一言ずつおうかがいしてみた。

○龍ケ崎一高　宮本正和監督

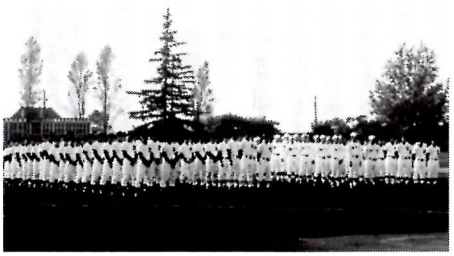
―いまはチームづくりのむずかしい時期だと思いますが、戦力をどう見ておりますか。

宮本　去年よりはまとまっていると思いますが、何か抜けたものがないと勝ち続けることはできませんから、それが作れるかどうか。それと、心が足りないですね。いまは。

○下妻一高　中山知久監督

―龍ケ崎一高との相性はいかがですか。

中山　悪くはないと思いますが、龍ケ崎さんは甲子園に何回も行っていますし、今日も第一シードですから、ぶつかってゆきます。いい記念試合になればと思っています。



グラウンドに整列した親善試合出場選手

○水戸一高　中山　顕監督

―百年前は、五大会無敗のチームですが、今回はいかがでしょうか。

中山　その頃は強いチームでしたが、いまの選手も野球をやる気持ちは、その頃の選手と同じだと思います。土浦一高は最近ベストエイトに進んだりして、強敵ですが、力を出し切りたいと思います。

○土浦一高　山越好宏監督

―新チームの状態はいかがですか。

山越　怪我人がいないのが何よりです。それに選手の数もそろっていますから、誰が出てくるか楽しみがあります。これからチームをどう固めていくかが課題です。

曇っていた空も午後には好天となり、夕陽が落ちる前に決勝戦が終了した。この日の三試合について、土浦一高野球部OB会神林実会長に感想をうかがってみた。

第一試合　龍ケ崎一4×―3下妻一

―明治の大会では龍ケ崎の二勝一敗でしたが、今日も熱戦でしたね。

神林　ええ、すばらしい好試合でしたね。好プレーも随所に見られ、終始緊迫したゲームでした。九回表に下妻が同点に追いつき、延長戦と思われましたが、九回裏に龍ケ崎が意地を見せてサヨナラ勝ちをおさめました。

第二試合　土浦一7―3水戸一

―明治37年7月28日、神立原の第一試合で、土浦は7―7から十回サヨナラホームランを打たれて負けていますが、今日は食らいつきましたね。

神林　まさに伝統の一戦でした。水戸の先取点を土浦が追いかける展開となりましたが、土浦がしぶとく追いかけました。地元の観衆の声援に選手が応えました。

決勝戦　龍ケ崎一10―1土浦一

―今日は完膚なきまでにやられましたね。

神林　龍ケ崎の打線はよく打ちますね。投手も力投しました。さすがです。土浦は来シーズンに期待を抱かせる選手がおり、たのしみです。大きく育ってほしいものです。

伝統と校風を誇る名門四校の選手諸君と、関係者の方々の多大なお力添えをいただきましたことに、心より御礼申し上げます。

親善試合出場選手

第1試合

下妻一

打順	位置	名前
1	5	島田
2	4	大山
3	6	鈴木
4	3	堀江
5	7	赤澤
6	9	上野
7	8	石川
8	2	市川
9	1	小寺

龍ケ崎一

打順	位置	名前
1	5	新田
2	7・9	榎本
3	2	村上
4	6	山本
5	4	舘
6	8	江川
7	3	白田
	3	丸山
8	9	勝山
	H・7	山下
9	1	田口
	1	馬上

第2試合

水戸一

打順	位置	名前
1	2	橘
2	7	青葉
	H	小林(康)
	R	後藤
3	8	服部
4	4・1	鈴木
5	5	小林(裕)
6	3	石川
7	6	横山
8	9	河合
9	1	栗橋
	4	横田

土浦一

打順	位置	名前
1	5	八木
2	4	山越
3	8	中前
4	3	鶴田
5	7	内海
6	6	江本
7	1	宮澤
	1	森戸
8	9	岡野
	H	渡辺
	9	正野
9	2	磯山

第3試合

龍ケ崎一

打順	位置	名前
1	5	新田
2	9・7	榎本
3	2	村上
4	6	山本
5	4	舘
6	8	江川
7	7	白田
	9	勝山
8	3	丸山
9	1	福島

土浦一

打順	位置	名前
1	5	八木
2	6	山越
3	8・1	中前
4	3	鶴田
5	7	内海
6	9	正野
7	1・9	塚原(鉄)
	9	橋本
8	4	塚原(達)
	H	渡辺
9	2	磯山

百年前、土中の名遊撃手田中は普通の手袋をして守っていた

明治37年7月28日、第一回連合野球大会第一日第一試合に、先攻土浦の一番打者として初の打席に入ったのは田中傳蔵（明治38年卒）である。その田中は、防寒手袋か作業用手袋をはめて遊撃を守っていた。

実は、明治37年の第一回連合野球大会がどんなルールによって、またどんな野球用具を用いてやっていたのか、私はまだほんのわずかしかわかっていない。飛田穂洲の『野球人国記』に、用具についてちょっぴり記されているので、うつしてみる。

〈（土浦中学の）選手中もっとも傑出していたのは、遊撃田中傳蔵君であったと思う。軽快なる守備は当時県内で君の右に出るものがなかった。37年神立原の大会に、水戸の柏が打った熱球をベース寄りに跳躍してシングルに納めた美技など、今なお筆者の眼底を去らない。この日田中君は普通の手袋をはめていたように記憶する。〉

当時の遊撃手は、現在よりも重要なポジションであった。ナインを紹介する場合、今日では投手、捕手、一塁手の順で紹介するが、当時は投手、捕手、遊撃手、一塁手の順であった。『学習院野球部百年史』はこの順序について、次のように記している。〈大将を投手、副将を捕手として順序を見ると直ちに理解できた。遊撃手は全守備位置のほぼ中央に位置するから中軍の将で、当時は投捕手と遊撃手が守備の中心で重きをなしたのだろう。〉

では、明治37年夏の連合野球大会で、守備の要である田中遊撃手は普通の手袋で守っていたが、その頃の選手はどんな用具を手にしていたのだろうか。茨城県内の記録が見つからないので、明治32年から37年まで宇都宮中学の選手であった君島武男に証言（『宇高野球80年』）してもらう。

〈投手、遊撃手だけがグラブを使用したが、捕手は大型ミット、塁手、外野手はやや小型のミットを使用していた。グラブも今日のような大型のものではなく日常使用する皮手袋に近いものが用いられた。〉

塁手と外野手が使っていた小型ミットとは、当時の広告でフィルダース・ミット（グラブのように指を一本一本入れるのではなく、ミットと同じように指を入れる）またはベースマン・ミットと称していたものと思われる。投手、遊撃手が手袋だったのは、活発な行動に向いていたのだろう。

宇都宮中学は明治29年から水戸中学との定期戦を行っていたし、旧制一高の名投手青井鉞（えつ）夫の出身校であるから、用具は土浦中学よりはかなり進んでいたと思われる。土浦中学はおそらく、捕手のミット、一塁手の野手用小型ミットが精一杯で、他の野手は手袋類だったのではなかろうか。

終りに、この頃の野球について、もう一度君島武男に証言してもらう。

〈走者が塁にいないときは、捕手は打者が二振するまでは打者の直後に居ず、ネットの所に下がってワンバウンドで捕球し、ツー・ストライクをとると捕手はマスクを着けて打者の直後で次の投球を待つという方法が行われていた。〉

百年前の野球の一端を記してみたが、今とはかなり形態の違う珍妙な野球であった。

県内初の校歌祭開かる

校旗制定百年記念校歌祭が、十一月十四日に本校体育館で開催された。校歌祭は旧制高等学校の寮歌祭に倣って、東京や埼玉などではすでに十数年前から、現在の高校でも行われるようになった。東京では日比谷高や新宿高、埼玉では浦和高や熊谷高など主に旧制中学以来の伝統校が集まって年々盛大に挙行されているという。

本校応援指導部OB会では、かねてより茨城県でもこうした催しが出来ればと、その機会を窺っていたが、今年が校旗制定百年目に当たる節目の年であることから、その記念行事としての校歌祭を企画するに至った。学校創立時、本校・兄弟校・分校の関係にあった水戸一、下妻一、竜ケ崎一に参加を呼びかけ、本校を含めた四校で実施することになった。

内容は、四高校の応援指導部(委員会)員や吹奏楽部員などが集い、それぞれの校歌や応援歌を歌い、エールの交換やリーダーの演技披露、そして各校吹奏楽部の得意曲目の演奏などで構成されるというものである。

開会式では、来賓として出席された下妻一高の猪瀬校長から「今日集まった四校は今から百年も前から野球で対戦してきた。文武両道でこれまですばらしい業績を残してきた。本日、この四校が一堂に会して行う校歌祭は誠に意義深い」との校歌祭開催を讃えるご挨拶があり、続いてこの度、進修同窓会から新たに寄贈された「校旗制定百年記念旗」の披露と、宮本卯之助商店のご好意で再修復された「進修太鼓」の紹介がなされた。

下妻一高為桜同窓会の鉄羅会長や同軽部名誉会長をはじめ、各校からOBも多数駆けつけ、会場は熱気に包まれた。

校歌祭の演技は水戸一・下妻一・竜ケ崎一・土浦一の順で行われ、それぞれ応援指導部(応援部・応援委員)や吹奏楽部によって、それに水戸一は合唱同好会、下妻一はチアガールも加わって熱の入った演目が繰り広げられた。応援リーダーらによる演技では、「納豆踊り」などバンカラさや長年培ってきた応援手法に兄貴分の貫禄が見られた水戸一、チアリーダーを交えたカラフルで華やかさを有しながらも、旧制中学の伝統を演じきった下妻一、強豪野球部に付き合い応援キャリアも豊富で力量も抜群の竜ケ崎一、女子リーダーが半数近くを占める、これまでに無い組織上の変革を乗り越え、土高応援スタイルをしっかりと守り続けている土浦一、と各校それぞれの個性がよく出ていた。

今回参加した四校はいずれも百年以上の歴史を有する県内有数の伝統校。その四校の校歌は全て明治時代につくられたものだが、これをそのまま(一部歌詞の字句改変はあるが)今に歌い継がれているというのは、ある意味では大変すごいことなのかも知れない。建学当時の理想を謳いあげた校歌は、時代の変化や教育制度の変革に押し潰されることなく、したたかに生き続けてきた。

「旧水戸中時代からの校歌は過激な歌詞だが、この古い校歌を歌う度に、私たちは今をどう生きるべきかを考えるのです」という水戸一高生司会者の言葉こそ、古い遺産を継承し、それをさらに発展させていくという伝統校の在り様を示しているといえよう。また、こうしたところに校歌祭を行う大きな意味合いがあるのかも知れない。ともあれ、自校の校歌を歌う番になると、ステージ前には会場のOBたちも加わり、肩を組んで校歌を高唱し、青春時を懐かしむ光景が見られた。

校歌祭

旧本館特別公開

平成十六年十一月十三日(土)・十四日(日)

今回の旧本館竣工百年記念事業の一環として、常設展示の外に特別展示も行われた。その筆頭は『名筆百年―初冬に薫る所蔵書画の世界』の名のもとに一室を設けたことである。ここに、土浦中学校及び土浦一高の歩みの中で寄贈を受け所蔵された多数の書画から、書八点・絵画十六点を選んで陳列した。

これも、今回初めて展示され来館者の目をひいたのが「明治天皇の御服(夏物平服)」である。土浦出身の望月茂氏(講談社)が知友の明治天皇侍従の澤宣元男爵を通して入手し、地元の旧土浦中学に寄贈された。その間の事情を記した澤男爵の書き付けが「御沙汰書」として添えてあり、由緒の明らかな御物として本校奉安殿に終戦直後まで納められていた。しかし、戦後は望月氏に返却され、現在は地元土浦の八坂神社に所蔵されている。

また、県下連合野球大会にちなんだ「百年前の野球資料展」では、校友誌「進修」の紙面に拠る第一回から第五回までの連合野球の記録を中心に、明治期の野球に関する資料が展示された。その多くは本校野球部OB色川弘氏(中48回)からの提供によるものである。「尺貫法による野球場図」や、「素手による捕球法」などという珍しい資料も展示され、野球ファンの興味をひいた。

旧本館特別公開

秋天や寮歌祭また一つ老ゆ

清水　芳朗

(朝日新聞「折々のうた」より)

老い行く『寮歌祭』を惜しむと共に、県内に芽生えた『校歌祭』の未来に期待したい。

支部だより

荒川沖・乙戸支部

荒川沖支部は終戦後、荒川沖地区に加え中村、右籾地区等により発足しました。その後いくつかの変遷を経て、母校の創立百周年を機に、卒業生数などを考慮し、荒川沖・乙戸支部として再生することとしました。当時の同窓会名簿での該当約四百名のうち、支部参加希望約百名で第一回支部総会を平成九年十月十八日に開催し、鶴町利雄氏（中学四四回卒）を支部長として再発足しました。爾来、二年に一回、支部総会を開催するとともに、随時役員会を開くなど活発な活動を行っています。

平成十六年度は、九月十九日(土)町内レストラン「うはぎ」にて、総会を行いました。当日は、ご臨席いただいた本部大曽根副会長（支部顧問）、山田校長から、同窓会本部の活動状況、校内の近況などをお聞きするとともに、特に町内出身の色川弘殿（中学四八回卒、習志野市在住）にお願いして「土浦中学野球部の思い出」と題した講話をいただきました。色川氏は母校の野球の真髄を著した「甲子園への道」の著作者として皆さんもご存知のことと思いますが、今回の講話でわが町内からも数々の野球の名手が輩出されていることを話され、出席者一同改めて感動した次第です。

このように、当支部は身近な情報交換などを通じて、会員相互の親睦を図るとともに、母校の発展に役立つよう鶴町支部長以下、創意工夫を重ね、活発な活動を心がけています。

同窓諸兄のますますのご支援とご協力をお願いいたします。

幹事秋山尚夫(高十三回)記

講師の色川弘氏

荒川沖支部総会

阿見支部

阿見支部総会は、平成16年11月20日、霞ケ浦と筑波の紫峰が一望できる景勝の地にある「割烹みとや」で開催しました。この場所に近接する霞ケ浦湖岸には、阿見町による仮称霞ケ浦平和公園の建設がすすめられています。

この施設は、「若い血潮の」予科練の歌で知られる予科練習生で、特別攻撃隊として戦死された練習生の遺品の展示資料館及び公園として整備され、後世に歴史資料を伝承する機能を有したものとして計画されました。完成の暁には全国から見学者が訪れるものとして期待されております。

総会は、同窓会副会長、青山和義先生、土浦一高教頭、阿須間謙三先生から母校の近況と後輩達の活動ぶりを伺い、出席者全員大変感心し意を強くした次第です。

今回は阿見町長、川田弘二氏（2年まで在籍）、及び元阿見町長、野口三郎氏（中41卒）も出席され盛会となりました。そして次回の支部総会に参加することを誓い散会となりました。

また支部活動として、年一回程度役員会を開催し、支部活動についての協議を中心に、役員交流を図っております。

最後に、阿見支部の事務局は代々阿見町役場内におかれOB職員が幹事を担ってきましたが、支部活動として総会、役員会のみとなっていることを反省し、報告とします。

大崎誠（高16回）

阿見支部総会

会報特集号　記事訂正

〔2面〕下段の見出し
旧土浦中学校本校竣工…委員長
→ 旧土浦中学校本館竣工…
〔4面〕旧本館関連記念事業(3)
の五行目
しかし痛みが… → 傷みが…
〔8面〕学び舎建築
二段目の二十五行目
バロック様式 → バラック様式

土浦一高ホームページ

アドレス
http://www.tsuchiura1-h.ed.jp

平成十七年度　進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会総会・卒業周年記念祝賀式は次の通り開催します。

一、期日　平成十七年四月十日(日)　午後一時
二、会場　土浦一高体育館

卒業周年記念祝賀式

卒業六十周年　中四十四・四十五回
卒業五十周年　高七回　定五回
卒業四十周年　高十七回　定十五回
卒業二十五周年　高三十二回　定三十回

一般会員・周年記念会員の数多くの会員の方が母校の門をくぐられることを期待しております。
尚、総会、祝賀式終了後、市内にて祝賀会(懇親会)を開催いたします。

お知らせ　お便り

卒業五十周年を迎えて

我々は、昭和二六年入学、昭和二九年卒業、以来半世紀の月日が流れ、その速さを実感しています。入学式に渡辺文弥校長先生が本校の校訓「自主・協同・責任」について訓示されたことを思い出します。また、学業については、各先生方から熱心に時には厳しく指導を頂きました。当時、先生方も、水戸一高に対抗することから、「追いつき、追い越せ」の目標があったように思われました。その間、昭和二五年六月、朝鮮動乱を機に社会経済産業等が一気に国内の力をつけ、安定した社会となり、次には「岩戸景気」、「神武景気」等々、日本の経済は急成長をとげてきて、一段と経済復興に重なった時代でした。我々は、こうした「時の流れ」と共に、社会人として、企業人の一人としてそれぞれ各分野で地域社会で努力し汗を流してきました。しかし、昭和五十年後半に社会が大きく変わりました。それはバブルの崩壊でした。以来、景気の低迷に続く不況、我々はその不況の中と戦いながら頑張っております。今回の総会・祝賀式には百余名が参加をして、友との再会を喜び様々な思い出を語らい楽しいひとときを過ごせました。今日ある我々は、恩師の先生方を始め諸先輩、地域の人、生まれ育った土地の人達のご指導ご協力の賜と深く感謝申し上げます。最後に母校並びに進修同窓会の益々の発展と、会員の皆様のご健勝、ご多幸を心からご祈念申し上げます。　(高六回　鈴木　親雄)

卒業四十周年を迎えて

昭和三十九年の春に学舎を後にした我々第十六回卒業生は、今年卒業四十周年を迎え、その記念として、去る四月十一日に、母校の新しい体育館で催された進修同窓会の総会に、二十五周年に続いて二度目のご招待を受けました。多くの友と一緒に出席させて頂きましたが、改めて母校の歴史と伝統の重さを実感いたしました。

さて総会の前日、我々は学年の同窓会を、国民宿舎「水郷」で開催いたしました。昨年の八月の幹事会に於いて、折角の機会であるからということで話が持ち上がり、同窓会の後は、そのまま「水郷」に一泊して、次の日に揃って総会に出席しようということになった訳です。学年の同窓会は、今回で五回目になりましたが、このような行事で絶対に欠かせないのが、B組の五頭英明君です。この度も彼の労に負うところが実に大きかった。もうひとつ今回の同窓会には嬉しい事がありました。昨年の暮の選挙の結果、土浦市長に就任されたF組の中川清君が、公務多忙の中出席してくれたことです。同窓生も約一〇〇名が出席し、彼の市長就任を共に祝うことが出来ました。又先生方は、学年主任の河野利雄先生をはじめ、矢萩力也先生、大竹勉先生、池井芳寛先生、小泉新治先生、青山和義先生の六名のご臨席を賜わり、全員からご挨拶を頂戴いたしました。司会のB組の飯嶋宏君お疲れ様でした。楽しかった時間はあっという間に過ぎ、締めはいつもの通り、声の大きなB組大川修君の指揮で校歌斉唱、同じくC組中村創蔵君の音頭で万歳三唱で目出たくお開きとなりました。続く二次会は、別室に用意された各組毎の会場に移って、始めはおとなしく、次第に入り乱れて、カラオケに興じ、尽きぬ話が夜遅くまで続いたようでした。

十年後は五十周年、二十年後は六十周年を迎えることになりますが、健康でその時を迎え、元気で又進修同窓会の総会へのご招待を受け、出席出来ることを願うばかりです。

最後にこの場をお借りして、進修同窓会の役員並びに先生、関係者の皆様に、この様な機会を与えて下さいましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

(第十六回卒業生D組幹事　飯村正司)

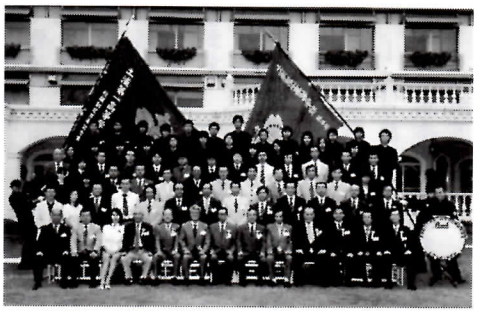
応援指導部創部四十周年報告

渡邊　愼一　(高20回)

本年、土浦一高応援指導部は創部四十年を迎え、八月十五日に京成ホテルに於いて、四十周年記念式典を開催致しました。当日は山田校長先生、中川市長、進修同窓会副会長大曽根先生、水戸一高応援団OBの方々等、ご来賓によるご祝辞の後、OB会から応援用太鼓一式の寄贈などの式次第を経て、最後に現役部員指揮による校歌斉唱で厳粛なる中に式典が終了致しました。続く懇親会では参加者の自己紹介や水戸一高応援団OBによる校歌披露もありました。

さて、この機会に当部の歴史をご紹介させて頂きます。当部は一九六四年に早大応援部の小松崎清氏(高13回)の指導の下に結成されました。折から水戸一高との野球定期戦も始まり、早大応援部の指導を戴いたリーダーテクニックは当時の県下の応援形式に強い衝撃を与えましたが、特筆すべきは部の名称と言えます。即ち、学生から遊離する印象の強い応援団という名称から、『応援指導部』という常に学生と共にあるとの願いを込めた名称を選んだ事は小松崎氏の高い先見の明と言え、永く我等が誇りとする所であります。

又、第十四代校長の長南俊雄先生(中21回)から寛雅・至誠・武勇の部訓も頂いております。このようにして現在まで至っていますが、近年、現役部員に女子生徒の進出が目覚しく、男子顔負けの奮闘ぶりが新聞紙上でも紹介されております。本年七月には校旗制定百年旗が進修同窓会から寄贈され、県下最大級の威容を誇っています。十一月にはそのお披露目として、旧本館竣工百年事業の一環で、水戸一、下妻一、龍ケ崎一の各校を招き『校歌祭』を開催し、OB会でも全面的に協力させて頂きました。最後になりましたが、部の活動は野球応援を始め全日制・定時制の各運動部の壮行会や進修同窓会総会そして東進会など幅広くなって参りました。今後も校歌と校旗を永遠に守り抜く事が我々の使命と考え、現役諸君とOB一体となって頑張っていきたいと思います。



応援指導部創部40周年記念式典

母校だより

―第五十七回一高祭―「SHINKA」

一高祭実行委員長　村川　佳誕

第五十七回一高祭が六月の五、六日の二日間にわたり開催されました。今回は一高祭実行委員中心として前回の一高祭が終了した時点から約一年間、一生懸命に活動してきました。今となっては一瞬の出来事のように感じられてしまいます。しかし振り返ってみれば、この準備の間にいろいろなことがありました。特に今回のテーマを「深化」「進化」「真価」を中心とした意味を込めた「SHINKA」に決定してからは、テーマに応えられるように様々なことを実行してきました。

目に見える所では、前回まで校舎のエントランスとして使用してきた昇降口脇の非常口が手狭で使いにくかったためその機能を通称黒の広場と呼ばれる場所に移動させました。この場所に移動することで広さの問題は解決できましたが正門（ゲート）からの距離が長くなってしまいました。そこで今まで使用していなかった黒の広場に店舗用のテントを、そこまでの通路には各クラスが制作した看板を設置して来校していただいた方々に距離を感じさせないための工夫をしました。また目に見えない所では雨天時用プログラムを作成しました。これは運悪く前回雨が降ってしまったことで対策をとることになったからです。実際、今回の一高祭において使うことはなかったのですが、各団体が協力することで例え雨が降っても全ての団体が発表することが可能な状態にできました。

こうして迎えた本番当日、オリジナリティー溢れるゲートは今年も来校者の視線を集め、赤レンガの広場ではこれぞ一高生と思わせるディベート大会や観客を魅了したM－SQUARE（クラス劇）が行われ、アリーナでは好評を博したのど自慢大会が開かれ、体育館では前・後夜祭が行われ、ミュージカルや弦楽演奏会などいずれも素晴らしかったとおもいます。もちろん校内や黒の広場では生徒達が工夫を凝らしたクラスの企画で盛り上がっていました。

少し残念だったのは二日目の途中から雨が降ったことです。ただそれでもたくさん来校していただけたので良かったと思います。

このように終了した第五十七回一高祭がそれ自体の「SHINKA」だけでなく、一生懸命に活動した一人一人の「SHINKA」に繋がっていると確信しています。

最後になりましたが、私たちの活動を後ろの方から支え、理解を持って見守って下さった諸先生方、保護者の方々、その他OB、OGの方々を始め、この一高祭に協力して下さった方々に全校生徒を代表してこの場をお借りしてお礼申し上げます。そしてこれからも一高祭を宜しくお願いします。

一高祭

一高オリンピックを終えて

二年F組　大澤　重仁

今年はグラウンドの改修工事のため当日グラウンドが使用できないというので、一高オリンピックの会場を霞ケ浦総合運動公園にしようと計画を進めていた。しかし二学期が始まり、工事が遅れていて学校で実施できるという話があがり、急遽会場を変更し、とても忙しかった。一高オリンピックが無事終わった今、ほっとしている。

今年は一高オリンピックのスタイルを少し変更した。学年種目についてのアンケートをとったところ、どの学年も男子はサッカー、女子はバレーボールに票が集まったので、例年と違い、どの学年も共通でそれらの種目を実施した。そして各学年の優勝チーム同士で学校一決定戦を行った。もう一つ大きな変更を行った。僕はこれこそ今回の一高オリンピックの成功と失敗を分ける大きなことだと思っていた。それは、全学年全クラスで毎年行われる共通種目、綱引きを大縄跳びに変えたことだ。大縄跳びの評判はとても良かった。クラスのみんなで声を合わせて練習している光景は微笑ましいものだった。アンケートでは来年もやりたいという意見も多かったのでうれしかった。

第二十七回一高オリンピック。一高全体のまとまりを感じた良い日々だったと思う。

一高オリンピック

―歩く会を終えて―

2年H組　中村　翔

このままで歩く会当日を迎える事が出来るのか。このフレーズが歩く会当日の朝まで、何度も頭を過りました。下見を重ねるたびに、次々に現れる新しい問題に頭を抱えました。当日一週間前になっても、準備が思ったように進まず、全く見えてこない完成像に気持ちが焦るばかりでした。生徒の皆さんが実際に歩き始め、どんどんとチェックポイントを通過していくにつれて、その不安は薄れていき、最終的に無事今年の歩く会を終える事ができました。

委員会で目標とされた「みんなが歩いて楽しめる道」。そこから今年のコースが出来上がりました。霞ケ浦ふれあいランドを出発し、霞ケ浦を渡り、爽やかな秋の風を背に、のどかな田園を通っていく。生徒の皆さんが歩いたあと、ただ歩いて疲れただけ、で終わらないようにと考え話し合い決めました。

今年は雨が多く、天候が心配されましたが、澄みきった空は私達の心までをも学校での緊張感から解放してくれました。日頃ゆったりした気持ちで景色を眺める事が少ない私達ですが、この一日の経験は普段見落としている何かをそれぞれの目に映したことでしょう。

歩く会の成功の裏には、多くの方々の協力がありました。先生方をはじめとする学校関係者、暖かい言葉をかけて頂いた地域の方達に、感謝いたします。それぞれの思いが詰まった小さな一歩が私達を最高のゴールへと導いてくれたのです。

歩く会

職員室だより

地歴公民科

全日制地歴公民科職員室は、特別教室棟2階のいちばん奥にあります。特に用事のない人はあまり訪ねて来ませんので、静かで落ち着いた職員室です。ほんとうはここでゆっくり本でも読んでいたいとか、じっくり教材研究などしている余裕のない最近の学校が恨めしいなどと思われる静かな環境にあります。夏は風通しが悪いせいか暑さに悩まされてきましたが、今夏隣接する地歴公民教室の冷房化が実現し、間のドアを開けておけば多少は涼しいという恵まれた環境になりました。

地歴公民科は現在8名の職員で構成しています。教務主任中島博司・第3学年副主任池井芳則・今年度並木高校から赴任した路川治の3人は、本校の同級生（高30）です。昨年度竜ケ崎一高から赴任した2A担任坂本俊一（高32）、3A担任大塚健司（高40）、以上が本校OBです。ほかに、教務副主任横瀬仁、第1学年副主任新井康芳、1C担任後藤光彦がおります。

地歴公民科は年齢差10歳の中に全員がおさまっており、学年や教務部・生徒指導部などの中核となっている教科です。大塚はテーマ「SHINKA」のもとで行われた今年度の一高祭を担当。昨年度は8人中6人が担任、そのうち3人が3年生担任でした。

地歴公民科職員室は8人の部屋としては狭く、教材や資料であふれかえっていますが、コーヒーの香りや、知性と教養にもあふれる居心地のよい部屋です。窓から旧本館や楠が眺められ、新学期の頃には見事な桜が楽しめます。機会がありましたら、お気軽にお立ち寄り下さい。

保健室

一高全日制保健室に、十三年間勤務されました金塚久美子先生が平成十五年度末で定年退職されました。その後任として担当することになりました瀬能明美です。高校時代から大変お世話になった故吉田久子先生、新採からいろいろとご指導頂いた金塚久美子先生の後を引き継ぐことになり、誠に力不足ではありますが精一杯勤めさせて頂き、母校に少しでも恩返しができればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

健康診断等であわただしかった一学期、一高祭・一高オリンピック・歩く会の三大行事も無事に終了することができ、ホッとしております。様々な行事を通して生徒の顔と名前も少しずつ覚えてきました。夏休みには一年生の宿泊学習にも参加させていただき、クラス行事も楽しませていただきました。また、冬休みにはスキー教室があり今年も二百名の生徒が参加し、元気で楽しいスキー教室となりました。

「繊細な生徒が多いので大きな声は出さないように」と言われていたので極力優しく話すように心がけてきました。しかし、私らしくないことに無理を感じ、最近は地を出して元気な（乱暴な）対応をするようになってしまいました。

放課後はジャージに着替えグランドでラグビー部の生徒達と過ごしています。養護教諭らしくはないけれど、一番私らしくいられる時間であるような気がしています。

部活動だより

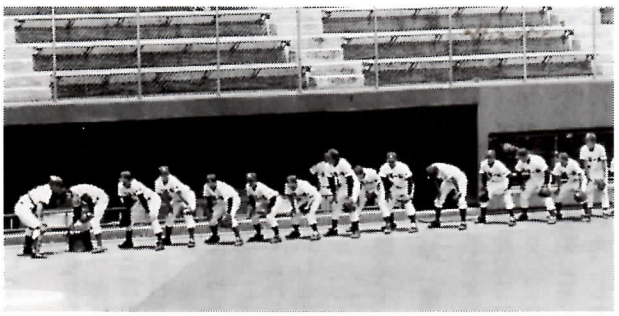
軟式野球部

ラストゲーム

主将　三年　吉松　聡

三年生にとって最後となる春季大会は、関東大会三位という結果で幕を閉じ、並々ならぬ感慨をもって思い出されます。

僕らの代は途中、入・退部する人が多く、気持ちを一つにすることが困難な時期がありました。しかし三年の春になると部は落ち着き、チームも熟成期に入りました。春季大会はいわゆるチームでもぎ取った勝利がいくつもあり、僕らをゾクゾクさせました。もちろん宿舎での部員同士の団欒も忘れられません。この楽しい時間を出来るだけ長く過すためにも、僕らは一試合でも多く勝つことを目指しました。



軟式野球部

大会が終わって、以前僕は先輩に「野球は結局個人プレイなんだよ。」と言われたことを思い出しました。あの時は反論できませんでしたが、やはりその考えが間違っていることを確信しました。先輩に今度会ったら一言言いたいと思います。

最後に軟式野球部を応援してくださった多くの方々と柏監督には、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

・関東大会の戦績

[第1回戦] 対　日大三　4－2
[第2回戦] 対　熊谷　5－1
[準決勝] 対　志村　1－2

ソフトテニス部

二年　北嶋　駿

私たちソフトテニス部は、男子十七人、女子九人の計二十六人で顧問の坂本先生・増山先生の熱心なご指導のもと、日々練習に励んでいます。

現在、校庭の改修工事に伴い、テニスコートもつくりかえることになり、外部コートを借りて練習をしています。移動時間もあり、限られた時間しかありませんが、それだからこそ何をすべきかよく考え、その日その日を大切にしなければならないと思っています。

先日行われた新人大会では、男女とも、団体の部で県大会ベスト16という成績を収めましたが、更に上位を目指していた私たちにとっては、不本意な成績でした。

特に、この大会にかけていた私たちは、考査期間前は勿論のこと、考査期間中も練習を休みませんでした。また、雨の日でも外で練習をしたり、台風の日にも集まって、体育館で練習したりしていただけに、試合後は、皆暫く話をしないほど落胆していました。

次の春季大会まであと三カ月。この悔しさを忘れることなく、技術を磨き、体力をつけ、精神を鍛えあげることが、私たちのこの冬の課題であり、試練でもあります。寒く厳しい季節の後には、必ず暖かい季節が訪れるように、ソフトテニス部の春を目指して、更なる努力を続けたいと思っていますので、今後とも応援よろしくお願いします。

平成十六年度　部活動の主な実績

・第40回県将棋春季大会
　男子個人A　準優勝・3位
・関東高校軟式野球大会県予選
　優勝
・県総体・関東ヨット大会県予選
　女子デュエット2位・女子ソロ1位
・第52回春季関東高校軟式野球大会
　3位
・関東高校ヨット大会
　女子FJ級ソロ6位
・第28回全国高校囲碁・県大会
　団体2位
・第28回全国高等学校総合文化祭
　文化連盟賞（器楽・弦楽部門）
・県吹奏楽コンクール
　高等学校Bの部　銅賞
・県合唱コンクール
　銀賞・加納賞
・県卓球選手権大会ジュニアの部
　男子ダブルス3位
・第59回国民体育大会（ヨット）
　セーリング少年女子シーホッパー級
　出場
・県弓道新人大会
　男子団体3位
・第37回県高校剣道団体勝ち抜き大会
　個人3位（五人抜き）
・県高校芸術祭　高等学校演劇祭
　優秀賞（県3位）

平成十六年度入試報告

新たなる栄光を目指して

生徒減下で合格数九三五に

進路指導部長　成島　義己

平成十六年度入試は、理数科廃止後最初の卒業学年の大学入試であり、受験者数が減少する中、これまでの合格数が維持できるかが注目されました。結果は東大二九名（新卒二〇名）を始め、京都大に三名（新卒一名）、一橋大九名（新卒六名）、東工大一五名（新卒七名）東北大二三名（新卒一三名）筑波大四九名（新卒三七名）の合格を出し堂々たるものでした。東大合格数は、全国公立高中第二位であります（現役合格数第一位）。また、一橋大の九人は本校初の快挙であり、本校の輝かしい実績に新たな一頁を加えるものとして賞賛に値します。筑波大も引き続き、全国第一位の合格数です。その結果、新卒生の国立大合格者は昨年比一名減に留まり、一二二となりました。国公立の合計では一三〇となり、平成十一年度以後では一番多い数です。

私大の方では慶応大七六名（新卒三三名）、早稲田大一四四名（新卒六八名）、上智大三七名（新卒一六名）、東京理科大九五名（新卒四〇名）の合格者を出しました。特に早稲田大は記録的数字となりました。早慶二二〇（新卒一〇一）も嘗てない大変な数字です。

懸案の国立大医学部についても一九名（新卒五名）が合格しました。

他の私立大等を加えた合格者の総数は九三五名（新卒四四三名）に達しました。本校生の定数減を考慮すると、近年では大変多い数であり、内容的にも充実していると言えます。

一方、五月一日現在での新卒生の進学者数は前年比二名減の一九四名ですので、進学率六〇％がほぼ達成されました。

本年もこれまで指摘されてきた難関大志向が顕著で、東大・京都大・一橋大・東北・東工・筑波大の受験数が全体の七割近くを占める中、合格率も四割台と健闘していること、前述の私大合格実績が好調なこと等が要因としてあげられます。

難関国立大を第一志望として他は受験しないか、私立大併願をするが、早稲田・慶応・上智等の大学以外では合格しても進学しない、という構図が徹底してきている中での進学率の回復という大変好ましい結果となりました。

昨年度卒生の方は一六〇名のうち、一三五名が進学しました。東大・京都大・東工大・一橋大・東北大・筑波大・早稲田大・慶応大および国立大医学部などへ多くの合格者が出ていて、雌伏一年の苦労が偲ばれますが、すべてが第一志望を貫徹出来たわけではありません。むしろ、第二の策として主要私大を併願し、合格を多く勝ち取る中で進学先を選ぶという現実的な組み立てを実行している者が多くなっています。そうした事情を背景に早慶の合格数は増えたと思われます。

本校生が志を高く保ち、果敢に難関大受験に挑戦し、合格していくのは大変喜ばしい限りで、希望に見合う実力養成という厳しい試練がこれからも続くわけですが、おかげ様で教師冥利につきる至福の時を過ごして居ると言えます。

以上ご報告致します。

平成16年度入試合格状況

国公立大学

大学	合格者	新卒
北海道大	6	1
東北大	23	13
茨城大	9	8
筑波大	49	37
千葉大	10	7
お茶の水大	4	3
東京大	29	20
東京外語大	3	2
東工大	15	7
一橋大	9	6
横浜国大	3	3
大阪大	2	1
京都大	3	1
岡山大	3	1
山梨大	1	1
新潟大	2	1
富山医薬大	2	1
群馬大	2	0
東京学芸大	3	1
金沢大	1	1

大学	合格者	新卒
宮崎大	2	0
熊本大	1	1
信州大	2	1
鳥取大	1	1
徳島大	1	0
香川大	1	0
奈良女子大	1	1
東京・農工大	1	0
広島大	1	0
国立大計	199	122
茨城県立医療	2	2
東京都立大	3	0
横浜市立大	2	2
岐阜薬大	1	1
公立大計	14	8
防衛大	2	0
防衛医科看護	1	1
大学校等計	4	1
国立短大計	0	0
私立短大計	0	0

私立大学

大学	合格者	新卒
青山学院大	12	9
学習院大	11	8
慶応大	76	33
国際基督大	2	2
上智大	37	16
中央大	36	11
津田塾大	10	8
東京女子大	11	7
東京理科大	95	40
日本女子大	11	4.
明治大	49	20
立教大	38	22
早稲田大	144	68
法政大	20	11
北里大	12	4
芝浦工大	9	4
日本大	12	3
東京電機大	4	1
私立大計	718	312
合格者総計	935	443

平成15年度 進修同窓会決算書

収入額　一金　19,845,992円也
支出額　一金　14,650,876円也
差引残高　一金　5,195,116円也

【収入】　単位：円

	項目	予算額	決算額	比較増減	備考
1	繰越金	7,937,636	7,937,636	0	前年度繰越金
2	終身会費	100,000	140,000	40,000	4名
3	年会費	7,000,000	9,851,000	2,851,000	3,020名他
4	入会金	1,805,000	1,780,000	△25,000	新会員全・定356名×5,000円
5	寄付金	0	137,252	137,252	下記に記載
6	雑収入	1,364	104	△1,260	預金利息
	合計	16,844,000	19,845,992	3,001,992	
	ご寄付者名	卒業25周年同窓生一同様、中37回卒業生一同様より			

【支出】

	項目	予算額	決算額	残額	備考
1	総会補助	700,000	807,318	△107,318	資料、会場設営代外
2	会報発行費	4,000,000	3,365,072	634,928	会報印刷、送料代
3	通信費	300,000	33,480	266,520	切手、はがき代
4	卒業記念品費	200,000	139,200	60,800	卒業証書用筒代
5	卒業60,50,40,25周年記念品費	400,000	400,000	0	卒業周年記念品積立
6	会議費	500,000	149,249	350,751	
7	支部連絡費	300,000	200,000	100,000	支部会補助
8	生徒奨励費	1,200,000	1,200,000	0	生徒会補助
9	別途積立金	6,000,000	6,000,000	0	積立会計へ
10	慶弔費	100,000	0	100,000	
11	事務局費	1,000,000	425,909	574,091	サラト事務処理費他
12	旧本館活用事業費	1,995,000	1,930,648	64,352	看板、展示パネル等代
13	予備費	149,000	0	149,000	
	合計	16,844,000	14,650,876	2,193,124	

上記のとおり決算しました。　※項目間の流用を認める。

平成16年3月31日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長　幡谷　祐一

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成16年3月31日

監事　平田　公敏　印
監事　田嶋　栄吉　印

進修同窓会会務分担 (平成16年度)

1．本部

担当	本部役員		学校	主な業務
総務	横田 中川	木島　説田　小野(慶) 谷中	教頭 校内幹事	会議の招集・設営・進行 同窓会の総括的業務
経理	平田	小野(治)　石川　渡辺 柴沼　小城	事務部 校内幹事	予算編成と執行・決算 諸会費等の徴収
会報	大曽根	木島　上木　谷中　堀越 宇田川　宇田　鈴木(志) 鈴木(淳)	教頭 校内幹事	会誌の編集・発行
名簿	青山	小網　柳沢　野村　草苅 小城	教頭 校内幹事	名簿の編集・発行 会員の情報収集・整理
事務局	大曽根 青山 櫻井	谷中　野村	教頭 校内幹事	事務局と相互連携
監事	梅澤　田嶋			本会会計の監査

2．支部

支部会等に際して、本部に出席要請がある場合は、会長または下記の副会長のうち1名が、校長（または代理）とともに出席する。ただし、遠隔地の場合にはこの限りではない。

横田、平田、大曽根、青山、植木、幡谷(浩)、櫻井、中川

3．進修同窓会校内幹事

高30 池井 芳則(地公)　高30 路川　治(地公)　高32 坂本　俊一(地公)
高34 酒井 貴美(数学)　永山 雪夫(事務室長)　藤田あかね(主事)

ご協力に感謝

多くの皆様のご尽力とご協力をいただき、「旧土浦中学校本館竣工百年記念事業」が盛会裏に終了する事が出来ました。心から感謝申し上げます。特に、ご協力をいただきました方につきまして、会報の特集号で一部ご紹介をいたしましたが、次の皆様方にも、多大のお力添えをいただきました。紙面をお借りして、ご紹介をいたしますと共に、深く感謝申し上げます。高4回岡野靖様、高7回岡野琳様（岡野保次郎氏に関する資料）、高5回本間隆雄様（明治天皇の御服）、高14回宮司彰様（下村千秋氏、高田保氏関係の資料）、高23回武井秀一様（武井大助氏に関する資料）の各氏からは、たくさんの資料をご提供、ご寄贈いただきました。また、東京芸術大（熊岡美彦画伯の絵の修復）、宮本卯之助商店（太鼓の修復）、久保秋博恵様（書の表装）、大和田表具店（書の表装）の皆様にも献身的ご尽力をいただき、厚く御礼申し上げます。

尚、進修同窓会旧本館活用委員会では、母校に関する資料の収集を行っておりますので、古いアルバムや昔の教材などをお持ちの方は、是非ご提供いただきたくお願い申し上げます。

旧本館竣工百年記念事業推進委員

主催者：幡谷祐一、大曽根宏亮、山田隆士、横田尚義、桜井光孝、平田公敏、青山和義、梅澤正之進、田嶋栄吉

旧本館活用委員会関係：飯村弘、栗山作次郎、大塚栄、飯田哲也、片岡博、風間俊也、上木幹夫、清水浩、宮本昌子、今宮直彦、古徳尚一、渡辺慎一

同窓会本部関係：木島幸夫、石川信廣、説田太郎、小野慶一、野村ルナ

応援指導部関係：高柳明己、佐藤正美、伊東明彦、栗本護

野球部関係：島田卓光、小倉衛、神林實、小林正気

学校関係：阿須間謙三、福田良市、永山雪夫、中島博司、臼井健司、池井芳則、路川治、山越好宏、坂本俊一、大塚健司

会費納入のご協力とお願い

平成十五年度の会費納入状況は、三月末現在、三、〇二四名の皆様から、九、九九一、〇〇〇円を頂きました。

今年度も納入して頂きたく、振替用紙を同封いたしました。会費は同窓会事業費に充てられますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

今年度は本校に旧本館竣工百年というまた新しい節目が加わり、改めてその歴史の長さを感じる今日この頃です。一方で新体育館の完成に伴うグラウンド改修工事も始まり、旧本館以外の学校の外観は年とともに変わっております。教育現場でも教育環境の変化に伴い、新たな模索の状況下にあります。とはいえ、旧本館のように時代の流れに安易に迎合することなくどっしりと構えた対応がとれればと思います。最後になりましたが、校内幹事の不手際から本会報の発行が遅れましたことをお詫びするとともに、本号の編集にあたり、各方面の方々から多大なご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。今後とも進修同窓会をよろしくお願い申し上げます。

◇◇◇

進修同窓会会報第61号
発行日　平成十七年一月一日
会報編集委員会
編集委員長　大曽根宏亮
編集委員　木島幸夫　上木幹夫
谷中良雄　堀越　博
鈴木志郎
宇田川仁一郎
宇田邦利　鈴木淳一
校内　阿須間謙三
池井芳則　路川　治
坂本俊一　酒井貴美
永山雪夫
藤田あかね